

渋澤さんが選ぶ3冊

『宝島』

スティーヴンスン作 海保眞夫訳
798円 岩波書店

偶然手に入れた1枚の地図を手に、財宝が眠る宝島へと旅立つ少年ジムの冒険物語。恐ろしい海賊との対決シーンは手に汗を握る展開で、読み応えたっぷり。

コメント●悪役たちが魅力的。「海賊船で宝探し」というテーマの面白さは不変。ゲーム好きな現代っ子も夢中になるはず。

宝島



『おやすみなさい フランシス』

ラッセル・ホーバン文 ガース・ウィリアムズ絵
松岡享子訳 1050円 福音館書店

部屋の暗がりになり、なかなか寝付けないアナグマの女の子・フランシスが、眠りに落ちるまでを描いた絵本。どんな子にも当てはまりそうな、微笑ましい物語。

コメント●これを読めば「暗がり怖いのは自分だけじゃない」と子どもは安心できる。不安を受け止める両親の愛情深さも印象的です。

おやすみなさい フランシス



『おやすみなさいおつきさま』

マーガレット・ワイズ・ブラウン作 クレメント・ハード絵
せたていじ訳 1050円 評論社

子ウサギが照明、風船、月など目に映るもの一つ一つにおやすみのあいさつをしながら眠りに就く。平易でリズムカルな英語で書かれた英語版も人気。

コメント●「おやすみなさい」の繰り返しに子どもは大喜び。声に出して読むことで、「言葉のリズムを味わう楽しさ」を親子で実感できます。



読めば必ず「発見」がある
その喜びを子に伝えたい

シブサワ・アンド・カンパニー代表の渋澤健さんが、少年時代に夢中になったのが『トム・ソーヤーの冒険』や『シートン動物記』。「北米の大自然の中で繰り広げられる少年たちの冒険や野生動物の生態といった、未知の世界を垣間見られることがこの上なく楽しかったですね（渋澤さん）。子ども向け百科事典をそろえ、本を手に取りたくなる環境を整えてくれた両親に感謝しているという渋澤さんは、3人の息子が本好きになるよう、書店や図書館に意識的に連れ出そうと心掛けてきた。「本を読め

ば必ず何か発見があるもの。その喜びを知ってほしいのです。私自身、第三者が培った思想や知識を、読書を通じて自らのものにできたという実感があります。また、企業の長に不可欠な「自分の身を他に置き換え、て考える想像力」も本から養えたと思っています」（渋澤さん）。



渋澤 健さん

シブサワ・アンド・カンパニー代表取締役

1961年生まれ。UCLAのMBA経営大学院修了後、ファースト・ボストン証券、JPモルガン銀行などを経て現職。著書に『渋沢栄一とヘッジファンドにリスクマネジメントを学ぶ』（日経BP社）など。